

私と日本学術会議

内田 安信

学会の推薦のまにまに：私の属する日本口腔外科学会は、歯科医学界では最大の学会だけに、ここでの代表者が日本学術会議に出席する事が習わしとなっていた気配があった。日本歯科医学会の傘下の有数の学会に加え、関連の学会を含めての 30 数余の学会が、当時日本学術会議の会員を選出出来る母体と決められていた訳なのである。歯科医学では 3 分野に別れ、その傘下に約 50 ばかりの学会が包括されていたのである。

3年に一度、会員選出の為の選挙が、投票しかもトーナメント方式で実施され、最期に生き残った人が会員候補者となった次第である。歯科医学からは 3 人が選ばれる為に出身母体の学会は 50 近くの学会であったと思われる。このような仕組みで私は、第 16 回、17 回、18 回の 3 回、結果的に 9 年間に亘っての、日本学術会議会員として選出され、微力乍ら会員としてその役職を勤めた次第である。全体として 215 名の会員を以て成立した訳なのであり、第 20 期からは選出方法が改革されて、従来第一部から第七部迄有ったものが第三部に改変され、会員の他に倍くらいの数の連携会員も選出されて、今日に至っているようである。

さて、そのような次第で、会員選出母体や選出方法、会員の種別、学術会議が 3 分野に類別された変化等に伴い、日本学術会議の実態は、大きくその様相を変えるに至っている。最近のその様態は知る由もないが、自ら歩んで来た会員時代の幾つかに就いて、希求した期待や願いを列挙して、往事を顧みたいと思う。

閑話休題：さて何を語ろうかと思案したものの、医歯薬アカデミーの事業のうち、思い出に残った夏季部会で、日本各地を廻っての、会員同士の家族を含めた交友と交歓こそが、その有意義さで、第一に挙げられよう。

会員であった 3 期 9 年間、その常日頃、感得して斯くあるべし！との将来構想を記述してみたい。

さて、1' の項目として挙げたいものは、仙台、北海道、長崎、金沢、の夏季部会の事柄に就いてである。地元出身の会員の高配に依るテーマの講演を聴取した後の、懇親交歓会の催しは、個人では到底申し込みすら出来ない様な、素晴らしい有名旅館や料亭での長時間に亘る交歓の楽しい集いでもあった。学術会議はその名の如く、学術に関する会議を実施実行する機関であり、それらの成果を踏まえて会則に従った手順手続きを経て、政府に物申す機関と言える。回顧すれば確かに 3 期 9 年間の任期は、それは長いものであった。いま今年の年頭に送付されて来た 2014 年 11 月現在の会員名簿を見る時、転た感慨無量なるものを覚えるのである。

即ち、嘗て学会誌や業界紙更には一般広報の新聞等の紙面で、大いに斯界で活躍され研究の学者、将又医学会や学会を初め、社会活動等で有名を馳せ、時代を画し瞠目すべき業績を挙げて居られてきた先輩各位と、席を同じくして身近に接す事も出来、親しく会話も出来る幸せを味わう機会と環境に、この日本学術会議が存在している事は、洵に不思議であり僥倖と言わざるをえない。それらを事実常日頃感動し、感慨無量な思いに駆られる事が多かった次第である。会員互いに出自やら、個人の情報や、自宅環境や、考え方など、会議、取り分けこの夏季部会なかりせば、到底知る由もない個人の側面迄を親しく知り得て、一層親密に交誼できた喜びは、新たな崇高な人間関係構築ができ、これこそが感慨一入であり、心からの喜びと感動を新たにしている。学術研究の裏話や家庭

での有り様、果ては趣味や登山の話、生き様等々、お互い胸襟を開いての懇親、歓談など思い出は尽きない程貴重で、貴重な交友と人間関係が構築されたものと思われる。

次いで、2 'の項目として述べたいものは、日本学術会議の将来の有り様である。昔は第一部から第七部迄存在したので、当時の喫緊のテーマを主題として各部に略均等に委員を割り当て、委員長はそれに近い部から選ばれた。此処迄は良いとして、医歯薬の第七部関係の審議に、他の部迄が関係すると、会議は用意に纏まらない。詰まるところ七部と六部とで結論を導き、それを総会にかけて総理大臣申請にまで持って行った事が有った。他の理系文系の学科は後発するとの由であったが、遂に結論が出なかった事がある。焦点は絞り難く大勢で論議すれば良いとの考慮も一考の要があった。

更に根本的には、日本学術会議はその名の示す通り会議が主体だけに、常に会議に明け暮れていればそれでよしとする見解も聞かれたが、多くて年に2本、通常年1本の総会報告を仕上げるのがやっとであり、困難な時は会長の対外報告で済ませる事が有ったようである。会議は開けども結論が出ないのは215名の会員が夫々の高い見識をお持ちの所為であったかも知れない。それもこれも会員は交通費のみの給付で手当も無く、学術会議全体で年間約15億程度の経費しか与えられず、手足も挽ぎ取られて活動で、仕様が無い俚なのである。会員は飽く迄会員であり議員ではないので、歳費は愚か、手当など皆無なのである。謂わば手弁当の会議を数多く課せられていて、国会議員さん方とは全く異なっている事を、世間も承知して欲しいと常々考えてきた次第である。事程左様に、例えば褒勲章等に際し、世間は、学術会議の会員の経歴は一顧だにされていない事実をご存じであろうか。学会も全く同じであり、選挙で選ばれ会議に明け暮れて居り乍ら、相応の待遇は無いものと同じと言っても良いと思う。この辺あたりに、曰く言い難い要因が、世間離れをしている日本学術会議と言えるものなのであろうかと、思われる。

最期に、有り難く麗しい我が日本学術会議の心温まる事実を公表してこの稿を終える事とする、それは、この原稿執筆中に届けられた平成26年11月現在の同友会会員名簿の内容である。その69頁に平成16年以降鬼籍に入られた逝去会員名簿が7頁に亘って鄭重に記載されている事である。思わず紙面を開いて心からの哀悼の誠を捧げた次第であった。学術会議ならではの貴重な取り扱いであり、他の組織では余り見られない尊い事である。医歯薬アカデミーでの夏部会、貴重な2葉の写真を提示致し、ご参考に供したい。会員の皆様のご健勝とご発展を心から祈念致し文を閉じたい。

写真 (データ) 2枚挿入あり

●プロフィール

内田 安信

日本医歯薬アカデミー監事

日本学術会議第18期第七部幹事

日本学術会議第16~18期第七部会員

学校法人東洋公衆衛生学院理事長

東京医科大学名誉教授

明倫短期大学名誉教授

日本心療内科学会顧問

日本歯科心身医学会名誉理事長

日本自律訓練学会特別表彰名誉会員